

Title	「アクティブラーニングにどう取り組むか」報告：アクティブラーニング研修会
Author(s)	齊藤, 伸
Citation	聖学院大学総合研究所 Newsletter, Vol.23-No.3, 2014.3 : 47-49
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=4963
Rights	



聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository and academic archiVE

アクティブラーニング研修会 「アクティブラーニングにどう取り組むか」報告

2014年1月29日(水)、玉川大学経営学部の菊池重雄教授を講師としてお招きして、本学のFD委員会と総合研究所(研究支援課)の共催による研修会が本学上尾キャンパス4号館において開催された。その主題は「アクティブラーニングにどう取り組むか」であり、講演およびワークショップが基礎総合教育部を含む全学科対象にて盛会にて開催された。参加総人数は44名[非常勤含む](内訳:教員29名,職員15)であった。以下、本稿ではその概要を記す。

名前とアイスブレイク 講演者は冒頭で自身の学生時代における米国への留学経験を回顧し、その経験が神学を専門とする講演者をして日本と米国における高等教育の相違を実感させ、後に我が国におけるその改革の必要性を実感したと述べた。菊池氏が指摘する日米間での大きな相違は、教員と学生との関係、とりわけ相互に名前を知っているかどうかには大きな相違があると言う。恐らく日本の多くの大学では、その講義を担当する教員の名前も知らずにそれを受講している学生が多いことだろう。そこで菊池氏は、自身の自己紹介から取り掛かった。実はこれが菊池氏の巧みな狙いに基づいたものであり、授業のなかで教員が学生の名前を覚え、また逆に学生が教員の名前を覚えることの意義を浸透させるものであった。その後、研修会への参加者は4,5名のグループで自己紹介および自らの名前がもつエピソードを語ることによって、冒頭の10分ほどでアイスブレイクがなされた。

進学率の上昇による高等教育の変化 続いて菊池氏は、高等教育がこれまで社会的な変遷と共に変化してきた歴史を大まかに概説する。高等教育学の古典ともされている著名なマーチン・トロ

ウ(Martin Trow)の”Problem in the Transition from Elite to Mass Higher Education”(1973)によると、高等教育はその進学率によって教育の機会と目的が次の三つに区別される。①進学率が15%未満の場合:その教育を受けることは特権的であり、その目的は支配階級としての精神と性格を形成することに向けられる。②15~50%の場合:高等教育は権利を保障するものであり、専門化したエリート育成や、社会指導者の育成に向けられる。③51%以上の場合:高等教育はユニバーサル段階に至り、それは義務化する。そしてその目的は産業社会に適応する国民の育成に向けられねばならないことになる。現代の日本がいる状況は言うまでもなく③であり、菊池氏はまずは大学がこうした状況のうちにあることを認めることの重要性を指摘する。

学士課程が育成するコンピテンシーの変化

上記のように進学率の上昇に伴った高等教育の変遷は、それにともなって同時にその課程において育成すべきコンピテンシーの変化にも結びついてくる。コンピテンシー(competency)あるいはコンピテンス(competence)とは、ある職務を遂行するために最低限必要な能力を意味しているが、学士課程教育が育成すべきコンピテンシーは、時代の変遷によって次第に変化してきた。講演者によるとそれは大きく4つの時代に区分することができる。A. 職業に固有のコンピテンシー:これは中世における最初期の大学(ボローニャ大学)に相当する。B. 学問分野固有のコンピテンシー:オックスフォード大学やケンブリッジ大学が創設された時代で、各学問分野の専門家を育成することを目的としていた。C. 学問分野に共通のコンピテンシー:一般教養(general education)という考え方が広く浸透した時代、とりわけアメリカ

で盛んになった。D. 汎用的なコンピテンシー：より学術的な色彩が濃いBやCとは異なり、「社会的な」要素が強く、現代がこれにあたる。

菊池氏はこれら4つの時代的な区分から、今日における大学の教育がDの地点にあることを教育者自身が理解しなければならないという。というのは、多くのものが誤解や無理解のゆえに依然としてCの教育観に留まっているからである。今日に求められるコンピテンシーがDである理由として、学部学科の選択と就職先の不一致が挙げられた。たとえば玉川大学には農学部が存在するが、農学部の卒業生で実際に農業に関係した職業に就くものは8%ほどしかない。すると学部で農学を学ぶ意味とはなにか。農学部の学生が第一次産業、第二次産業ではなく、第三次産業へと就職するのであれば、そこで通用する一般的な能力の育成が今日の大学の使命ではないかと菊池氏は指摘する。つまり汎用的なコンピテンシーとは、知識や理解よりもむしろ、「学士力」と呼ばれるコミュニケーション能力、問題解決能力、適切な倫理観を意味しているのである。

社会の変化による高等教育のパラダイムシフト

汎用的なコンピテンシーを学生に身につけさせるためには、高等教育機関がパラダイムシフトを受け入れねばならない。菊池氏が指摘する変化は次の5点である。すなわち、①教員中心から学生中心の教育へ。②教育することから学習させることへ。③プロセス重視からアウトカム重視へ。④ディシプリンの教育から人材の育成へ。⑤大学での学習から生涯学習へ。菊池氏がもっとも重要なものとして挙げるのは⑤であり、学生が未来の世界に適切に対応できるようになるためのスキルを身につけさせねばならない。そのために考えられることは、学校教育を個々の学生に応じて最適化することであり、菊池氏によればその最適化を可能にさせるメソッドの手がかりがアクティブラーニングにある。

ワークショップ 本稿の冒頭で述べたように、本研修会は単なる講演会に留まるものではなく、実際にアクティブラーニングの手法を体験するワークショップが含まれていた。ここでは2つのワークショップが行われたが、より長い時間を割いて行われた「要約力トレーニング」というものを報告したい。それは学生に情報を整理する力、メモ・ノートをとる力、文章表現力を培うことを目的としたものであった。参加者には最初に震災と戦争との相似点について論じた2000字程度の文章が配布された。参加者はまずそれを通読し、200字～300字でそれぞれ要約した。次に自分が書いた要約文をパートナーと交換し、パートナーが書いた要約文からキーワードとなるだろう言葉を抽出した。それを各々が付箋紙に書き出し、最後には大きな模造紙にそれらをカテゴリーごとに区分してまとめ上げた。たとえば筆者のグループでは、テキストに登場する人間ごとに分類し、それぞれのキーワードをまとめた。菊池氏によると、これはレポートや論文の執筆を指導する際に先行研究に基づいた論述をさせるための訓練になると言う。場合によっては模造紙にまとめられたものを写真に撮り、それをもち帰ってレポート・論文の執筆



講演・指導者：菊池重雄教授（上段）

に生かすことも効果的とのことである。筆者を含め、すべての参加者がこのグループワークへ熱心に取り組んでいた姿が印象的であった。

質疑応答 最後に質疑応答について報告しておきたい。菊池氏への質問は次の通りであった。「ペアワークやグループワークを実際に学生に行わせるとなると、なかには様々な理由からそれが困難な学生もいることが想定される。そうした場合に対処するアイデアはあるか」。それに対する回答は次の通りである。「授業がこうした内容であることが分かると、その次から出席しなくなる学生は確かにいる。また、出席してはくるが、他の学生のグループへ参加することができない学生には、教員がパートナーとなって作業をさせている。なかには次第に慣れてくることによって、他の学生グループへと参加できるようになるものもいれば、最初から最後まで教員のみを相手にするものもいる。一つのアイデアとしては、TAやSAを用いることが考えられる。ただし、彼らが<教え過ぎない>ことへの留意が必要である。あくまで学びの主体は学生でなければならない」。質疑応答は時間的な都合上、短時間ではあったが実践に際しての重要な課題に対処する手がかりとなるものであった。

おわりに ここまで本学における最初のアクティブラーニング研修会の概要を報告してきた。本年度の1号館1階のラーニングコモンズや図書館のアクティブラーニング・スペースの整備に代表されるように、本学におけるアクティブラーニングの導入はこれから一層加速したものとなることが予想される。そうした意味において、本研修会はその第一歩として極めて意義深く、大きな一歩となったと言えるのではないだろうか。

(文責：齊藤 伸[さいとう・しん] 聖学院大学基礎総合教育部ポストドクター)